

伊丹万作「政治に関する随想」によれば、政治家は「社会人として、人格的には四流五流の人間が多く、良心よりも私的利益によつて動きそうな人間が圧倒的に多いのである。」である。

確かに、国会議員は社会人として四流五流の人間かもしれない。イチローや永友、韓流スター達による被災地、被災者に対する支援の輪が広がっている。しかし、国会議員が支援のための寄付をしたとの話しも聞かない。

更に、伊丹万作は書いている。

「一定期間、その白痴的大ドームの下に参集して、もっぱら支配階級の利益を擁護するための悪法の制定に賛成し拍手を送る。それだけである。」

と酷評している。

3月31日付の毎日新聞の余録でも

「11年度予算は成立したが、関連法案での与野党の相も変わらぬ駆け引きが続く。相手の失点をあげつらい自分の点を稼ごうという権力ゲームも終わらない。当面の危機収拾と国の再起という大問題をよそに、どうにも「11日以前」の日常から抜け出せないようなのだ。かつてない困難と闘う国民に希望と勇気を与えるような政治的な英知の結集ははなから望んでもムダなのか。非常事態のスイッチがいつまでたっても入らぬ政治の被災者はまたまた国民である。」

と言われるように、もっぱら自分たちの次なる地位の確立を目指して関連法案の制定に賛成せず、傍観しているように映るだけである。

今まで、国会議員が蠢くのは、与党は党内では派閥争い、党内での自分達の地位を築くために。野党は野党で、政権奪回のためにねじれ国会を利用するときに。

このような国家的大震災を前にして与野党国会議員の働きがみえない。地方議会では首長の出ず法案に反対するだけで、自ら政策策定能力がないと首長主導の議員半減・歳費半減の運動が各所から上がり、有権者の喝采を浴びている。

正にこの次期に、国民の苦難を忘れ、何もせず、派閥争いと政局に奔走する国会議員は要らない。地方議会と同様、議員半減・歳費半減すべきではないか。

今与野党議員は何を考えているのであろうか。自民党の内部でも民主党が声かけた大連立に賛成の声が上っている。しかし、自民党党首は記者会見で「常に360度、上下左右を見渡しながらか進むのがモットーだ」と述べるに止めたそうだ。今はそんな時ではない。



< 参照 > 伊丹万作「政治に関する随想」